右京一条二坊四坪の調査
－第400次

1　はじめに

調査地は、奈良市二条町二丁目に所在する、奈良文化財研究所の敷地である。奈文研は、もとの県立奈良病院の施設を利用しており、来るべき建て替え計画に備え、地下の状況と遺構の存否を確認するための調査を実施した。調査区は４箇所に設定し、幅２ｍ、総延長83ｍにおよぶ。調査期間は2006年１月16日から２月22日まで。面積は166㎡。

調査地は平城京条坊では右京一条二坊四坪・一条南大路に位置し、平城宮西面中門（佐伯門）の正面北側の坪にあたる。周辺の調査成果や条坊復原により、西一坊大路西側溝・一条南大路南北両側溝などの検出が期待された。以下、４箇所のトレンチごとに調査の成果を略述する。

2　調査成果

南区の調査（１月19日～１月20日）

東西９ｍ×南北２ｍ、南北４ｍ×東西２ｍのL字形の調査区を設定して調査した。

アスファルト舗装・クラッシャー下の土層は、上から下に、茶褐色土（盛土、約1.15m）、耕作土、灰色砂質土（いわゆる床土）、灰褐色粘質土、砂混じり暗灰白色粘質土、砂混じり黒灰色粘質土、暗灰色粘質土の順となる。このうち盛土が病院建設と改変に伴う土層である。

南区は、大部分を旧病院時代の浄化槽により攪乱されており、推定された一条南大路北側溝・西一坊大路西側溝をはじめ顕著な遺構は確認できなかった。現地表面から約2.2mまで掘削したが、沼状堆積と考えられる砂混じりの粘質土が厚く堆積しており、地山は検出できなかった。また、河川に伴う砂層の堆積も確認していない。

西区の調査（１月17日～１月26日）

南北36ｍ×東西２ｍの調査区を設定した。調査区の大部分に病院時代の建物基礎が縦横に残存していた。建物基礎は盛土内におさまり遺構面に達していないが、トレンチが狭く破砕は困難であったため、基礎のおよばない南端の南北約３ｍ分と北端の約4.5m分のみ調査した。

北端部　北端部の層序について、アスファルト舗装・クラッシャー下の土層は、上から下に、茶褐色土（盛土、約60㎝）、耕作土、灰褐色砂質土（いわゆる床土）、黄褐色砂質土、黄灰色土、灰褐色粘質土、暗褐色粘質土、青灰色粘質土の順となる。このうち茶褐色土(盛土)までが病院建設と改変に伴う土層で、現地表面から約1.6mで青灰色粘質土の地山を確認した。暗褐灰色粘質土は遺物包含層で、瓦器片を含む。

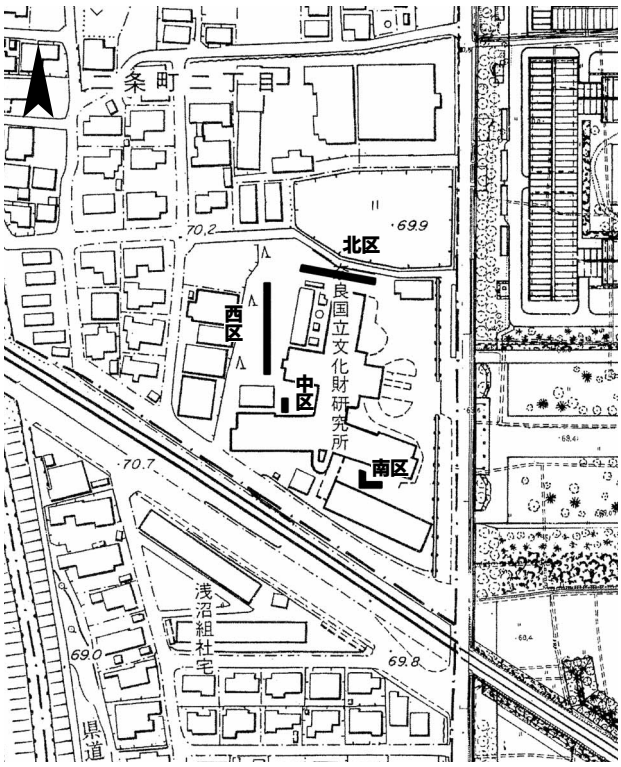


図208　平城第400次調査区位置図　１：3000

SD2876・SD2877　地山の青灰色粘質土で検出した東南東から西北西方向へ流れる２条の斜行溝。SD2876には、おそらく中世に属するとみられる土師器小片を含む。

南端部　南端部の層序について、アスファルト舗装・クラッシャー下の土層は、上から下に、褐色砂（盛土、約60㎝）、灰白色砂、灰褐色砂の順で、以下、青灰色・黒灰色・暗黄色などの砂・砂質土・粘質土の互層となり、現地表面から約1.8mで暗灰色粘土を確認した。このうち褐色砂（盛土）までが病院建設と改変に伴う土層、以下は旧流路に相当する。壁の崩落がいちじるしく、危険が大きかったため、一日で埋め戻しまで完了した。

SD2879　南流する旧流路で、その延長部分を中区で検出した。最下層の暗灰色粘土の直上には、葦を多く含む暗灰色砂質土が約15cm堆積していた。面的に流路を検出できなかったが、調査区内で葦を含む暗灰色砂質土が途切れることを確認しており、暗灰色粘土がある時期の流路東肩及び川底にあたると推測される。　（山本　崇）

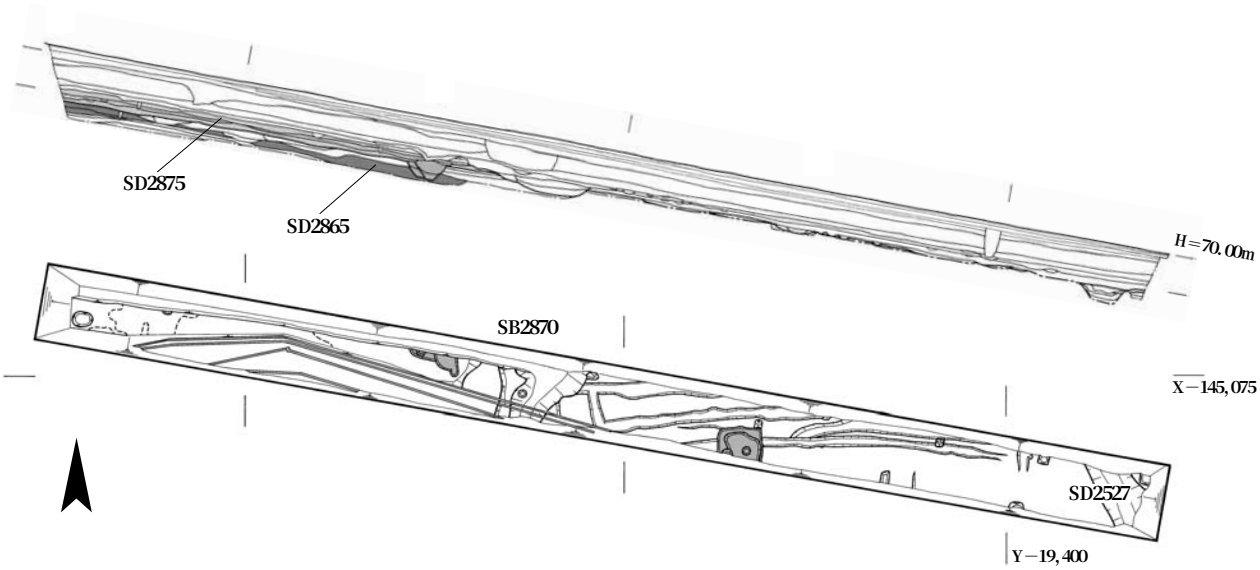
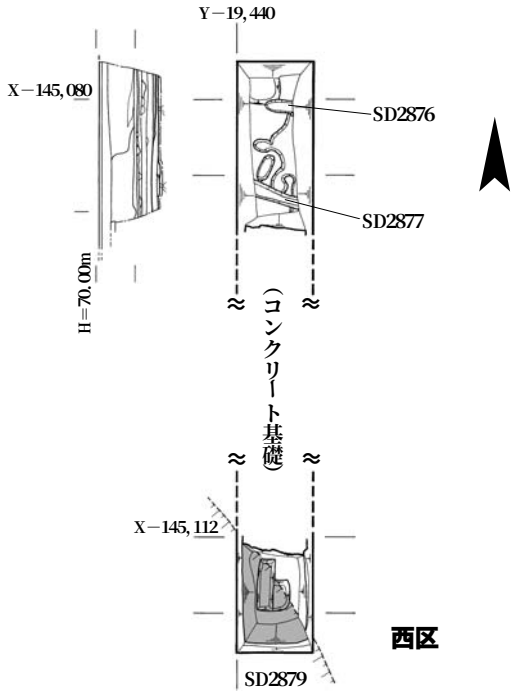


図209　北区遺構平面図・北壁土層断面図　1：200



中区の調査（１月27日～２月３日）

東西２ｍ、南北５ｍの調査区を設定した。

土層は、上から下に、黒褐色土（表土）、淡褐色土、暗灰色土（ビニールを含む）、暗灰色粘質土（セメントブロックを含む）、黄色粗砂（盛土）、暗褐色土混青灰粗砂、青灰色粗砂、黄色粘土混青灰色粗砂、黄色粘土混青灰色粗砂、淡灰色粘質土、黒灰色粘質土、淡灰色砂質土、暗灰色微砂の順となる。このうち黄色粗砂（盛土）までが病院建設と改変に伴う土層、暗褐色土混青灰色粗砂から黄色粘土混青灰色粗砂が河川SD2879による堆積土である。淡灰色粘質土から暗灰色微砂までが、調査区北端で検出した岸自体の堆積土である。なお、暗灰色微砂下層は、現地表面から1.65mである。

SD2879　流路の中心はトレンチの南側ないし西側にあって、粗砂が厚く堆積していることからかなり流速が速い時の堆積土と推測される。また川幅は、南側の調査区外に出るが少なくとも3.5m以上におよぶ。この粗砂層から出土遺物はない。岸部分を断ち割り調査した結果、

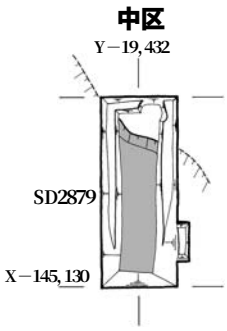


図210　西区・中区遺構平面図・西区北端部土層断面図　1：200

図211　西区全景（南側屋上から）

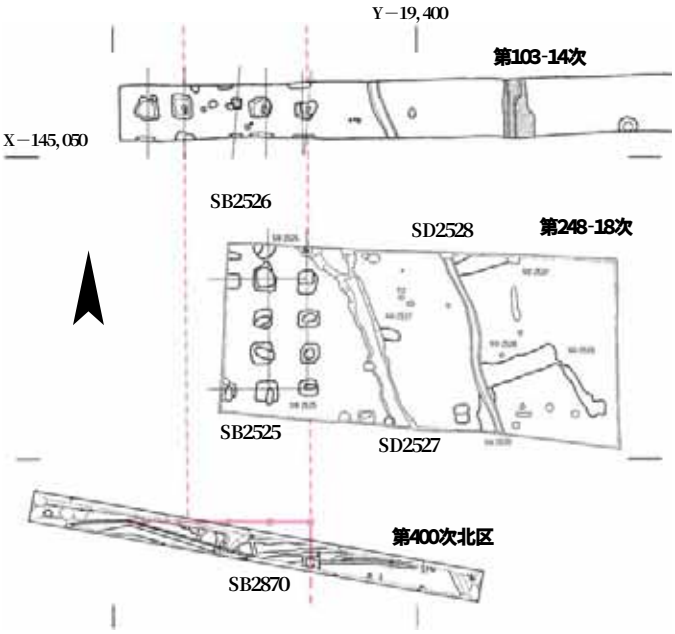


図212　SB2870周辺の遺構　1：500

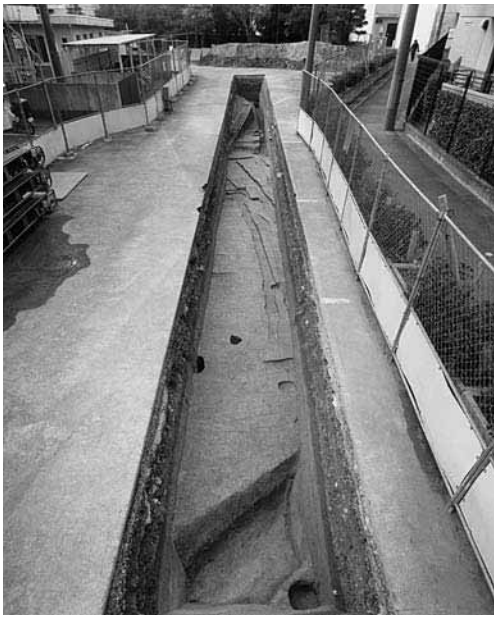


図213　北区全景（東から）

岸を構成する暗灰色微砂から、近世とみられる陶器片が出土した。この結果、この岸と流路SD2879はこの時期以降の所産である。岸を構成する土層も、基本的には河川SD2879に由来すると推定できるので、中区を含めた場所に河川があったとみられる。なお、かつて西隣りでおこなった平城第123－８次調査の所見によれば、遺物をほとんど含まない灰黒色砂質土層上面のレベルは、本調査区の最下部よりさらに0.9m下にある。　（深澤芳樹）

北区の調査（１月16日～２月22日）

東西30m、南北２mの西で北に振れる調査区を設定した。なお、トレンチ西方ではガス・電気等の埋設管を避けて掘り下げたため、南北50cm程度しか調査できなかった部分がある。

土層は、上から下に、二重のアスファルト舗装とクラッシャー（現行及び病院時代）、黄色土（盛土）、黒灰色土（旧耕作土）、淡褐色土（いわゆる床土）、黄灰色土、黄褐色粘質土、暗褐色粘質土の順となる。このうち黄色土（盛土）までが病院建設と改変に伴う土層である。黄褐色粘質土で耕作溝を検出した後、一層下の暗褐色粘質土で奈良時代の遺構を検出した。遺構検出面は、概ね現地表面から約1.3mである。なお、本調査区の主たる調査目的は、奈良時代の遺構の残存状況及びその範囲を確認することにあるため、地山（無遺物層）までの掘削は行っていない。北調査区中央には、旧畦及び近代以降の耕作に伴う大規模な溝があり、その東では、奈良時代の遺構検出面が良好な状態で残っていた。

SB2870　柱穴２基を検出したのみであるが、東西2.7m、南北2.4mに割り付けられ、かつて北隣りでおこなった第103－14・248－12次調査で検出した建物群（SB2525・SB2526）と柱筋がそろうことから、これらと一連の建物を構成する柱穴と理解される（図212）。

SD2527　北区東端で検出した素掘り溝。かつて北隣りでおこなった第248－12次調査で検出した溝に連続する。その所見によれば、古墳時代に属するものである。

SD2875　調査区西半には、旧畦の西側に流路の砂が堆積している。SD2875からは、古墳時代の高杯片とともに、奈良時代の須恵器・土師器、中世の土師皿が出土した。中世以降の流路であろう。

SD2865　SD2875を掘り下げた下層で確認した、古代以前に遡ると推測される流路である。

出土遺物

土器は整理用コンテナで２箱分出土した。瓦磚類の一覧は表21に掲げた。丸瓦・平瓦のみで、軒先瓦は出土しなかった。

表21　第400次調査出土瓦磚類集計表

	丸瓦	平瓦
重量	0.2kg	2.0kg
点数	5	40

3　まとめ

本調査では、西一坊大路西側溝・一条南大路南北両側溝などの条坊遺構は、推定地の攪乱が著しく、検出することはできなかった。また、奈文研敷地のうち、西南部分には秋篠川旧流路が東南流しており、奈良時代の遺構はほとんど残されていない可能性が高いことも確認した。一方、敷地の北・東、及び建物部分については、病院時代の建物基礎やU字溝などの施設は思いのほか浅く、盛土直下の旧耕作土を少し削る程度に留まっていることから、奈良時代の遺構が良好に残存していると推測される。今後の調査が期待される。　（山本）